

うしろアインシロジュー ニ二〇二〇年版



うろこアンソロジー 二〇二〇年版

目次

この雑踏に立てば、いろんなオトが聞こえてくる／
街角に群れる（形而上学的考察）

富澤守治

擬態

清水鱗造

コウノトリ

南原充士

悠久錦

鶉飼千代子

冬至

南川優子

昔日のおもいで

三井喬子

3つのリボン

有働薫

この雑踏に立てば、いろいろなオトが聞こえてくる／
街角に群れる（形而上学的考察）

富澤守治

この雑踏に立てば、いろいろなオトが聞こえてくる

日々は尊い、忘れないでいて欲しい

この雑踏に立てば、いろいろなオトが聞こえてくる

わめき声、会話、急ぐ人、意識は散り散りに乱れ飛び、混乱しただけの脳波が充満して
いる

初めてのひとは困惑し、毎日のように同じ時間に同じところを歩くひとびとは何も考え
ていないだろう

苦痛を背負うか障害を負ったひとたちはつらそうに歩く、ただこの場だけでも誰かでも

助けてやれば良いのに、誰も助けてくれない

夢多き若いひとびと、はしやぎ踊り明かすように歩いていく、あなたたちはどれほど幸福か。どうか忘れないでくれ

私とはいえば、ますますそんな日々を忘れていく。あなたたちよりも上の齡のひとたちはみんなそうなのだから

風の数ほども夢は散り、年末の街頭に散る雪のごと

乱れ飛ぶ暴風の雨粒のように、絶え間ない歳月は流れ

はたまた猛暑の日射に潜む、はらわたを煮える悪寒のように

すさまじいほどの不安は常に在り、愛するものの死と自らの苦痛にも出会う

絶望を騒ぎ、隠して行く春の日ののどかな桜の散るように

この街頭のウタ、詩はすべてのひとの人生を背負うのだ

幸福とはなにか、若いときからもうずいぶんと長い間、考え続けている

どうしてもこうしても、この街角は哲学者なのだろう

でもこのまえある小さな子供に言われた

「お前は神様になったつもりでもいるのか？ いったいどんな神だ。」

恫喝のようにその声は聞こえた

それでどうしたかといえ、実はまだなにも答えていない

その子はもう消えた

別に珍しいことでもない

一度会ったひとにもう二度と会わない

街角でそれは少しも珍しいことでもない

(このページの趣旨について 酒菜一丁目一番地 first posted at 2020.oct.10.17)

街角に群れる（形而上学的考察）

冬の夕暮れ、暗い

今日は人が多かった。雑踏

しかしこれは群れではない

行く道はそれぞれに違い

不思議に衝突することもない

群れることには繋がる意思があり、それは明白なものではあるはず

このひとびとの集まり様は、むしろお互いを避けつつづけている

声をかけてみよう

ふしぎな顔をする。あるいは不機嫌にうるさがれる

枯れた街路樹の樹の下

葉々は集光上もつとも適切な配置をして

触れ合うでもなく、まったく無駄がない、空間、葉と葉のあいだ

この街角の人間という動物種と一体どれほど違うのか

こうしてみると、人間の知性などどれほどの意味があるのかと思う

さらに生物の数万年という時間の流れのなかでは、生物種は大半が絶滅してそのほんの

一部だけが祖先となり繁栄してきたのだ

多系統の生物の存続の豊富さ、それから見れば、このなんの変わり映えもしない、知性があるとして特別でもない人間たちもいつまで生き残れるのだろうか

街角に集まりながら、何も産むことのない空虚さ。街角を作った人間たちは、実は街角に必ずしも必要ではないのだ

この街角を数万年後、闊歩するものは一体どんな生命体か、それとも誰もいない不在の荒れ果てた街角だけが残るのか

この街角は廃墟としても残るだろう。しかし誰もこの街角を片付けてくれるものもいま

い
街角にはなんの統一的な意思もない

さらに「街角」は人間だけを映すものでもない

むくどりの群れる姿を見る。大群

追い出された鳩たちがときどき人間のバスの待合室にやってくる

この鳩たちも行く道はそれぞれに違い

不思議に衝突することもない

何事もない日々の一日は尊いと言うが、それはそれほど文化的に、つまり人間専有の造形的なものでもなく

ただ集まり群れている（ように見える）ということも、知性も本能もその発現してくる「非論理の無を直感すること」に生み出されているのか？

私達の知性はそれを知ることさえもできないし、本能はそれを意識することもできない集まっても当たらないことは自然の法理にそってている？

それだけかも知れない

だとすれば「自然」そのものが発現しているのだ

空間概念・ものの後先・順序、つまりは「時間」、それらは直感された自然の後付けで「解

「積」して、そう名付けただけのものなのだ

何事もない日々の一日、非論理の無を直感していれば、「それ」はできる
しかし忘れればこの街角も大混乱するだろう
この街角も「自然」の灯りに照らされて、何事もなく、一日が過ぎていく

(このページの趣旨について 酒菜一丁目一番地 first posted at 2020.nov 11.23)

擬態

清水鱗造

○切り株柱

人間にはちよつと皮肉が効いた名前だが、その形がちよつど切り株のように見える多肉植物。上面には年輪のような模様があつて、切り株のひこばえのように葉ができる。成長しても太くなるだけで上にはほとんど伸びない。

○葉脈草

地面に落ちて腐り葉脈だけが残つた形の植物。なぜこのような擬態があるのかは、よくわからないらしい。

金色に近いので、地元の人たちはさまざまな飾りに使うという。

○髑髏草

白い実が髑髏の形で、人間や馬などの頭部の骨のバリエーションがある。

日の当たる場所の実の表情は真面目に見え、岩陰に成る実は笑いを感じさせる。

実が成る時季には子どもたちがザルに入れて遊ぶ。

よく金魚草の種の鞘が髑髏とそっくりであることが言われるが、髑髏草の場合は、形よりも硬い白い実の黒い骨の模様が似ているところが違う。

コウノトリ

南原充士

バナナを盗んだのはだれ？

きつとチンパンジー

バナナの皮ですべってころんだのは

目のよく見えないお年寄り

杖が飛んで車のフロントガラスに当たった

運転手はとっさにハンドルを切ったが

縁石に乗り上げてしまった

街路樹が傾き

スズメが飛び出した

子供が投げた石が当たって

落ちたスズメを

おばさんが裏の庭に葬った

庭には池があり

鯉が泳いでいた

ある夜だれかが鯉を盗んだ

鯉の骨を食べた犬が腹痛を起こした

動物病院に行く

何匹も犬猫が来ていた

評判のいい獣医が長い休暇をとった

ヨットで海に出かけると

コウノトリが舞い降りてきた

餌を与えらるゝとなつた

獣医は時々自宅に無線連絡をした

家にいる小さな子供が

身重のお母さんに

赤ちゃんはどうして生まれるの？

と聞いた

お母さんは絵本を見ながら

コウノトリの話をした

子供は夢の中で

空を飛ぶ鳥の姿を見た

地球が回った

太平洋には台風が発生した

コウノトリは籠を銜えて

はるばる日本にやってきた

赤ちゃんは無事生まれた

息も絶え絶えのコウノトリを

獣医が手当てしたら

すこし元気を取り戻して

またどこかへ飛んで行った

悠久錦

鵜飼千代子

繭を羊毛を麻を綿花を紡ぐよに
するすると解けてきたのならいいのね

糸巻き巻きを歌いながら

とんとん しやー

とんとん しやー

ひと目ひと目

一段一段

頭に凶柄を描き

まだ手応えのない作業に精を出す

草やゴミだらけのこの糸くずが

いつか

一張羅の生地になる

花瓶敷に

タペストリーに

そして 足元に

時間を味方にした

果てしない手仕事は誰の為

うさぎ跳びでもするように

とんとん しゃー

とんとん しゃー

とんとん

希求を金糸と織り込んで
悠久錦は天翔る

2020.12.13

冬至

南川優子

母よ あなたに

起こされたくはなかった

わたしは自分で

起きたかった

毎夕 日没と同時に

あなたはわたしを飲みこみ 夜が明けるまで

わたしを出さなかった

冬が深まるにつれ

あなたのなかで過ごす時間が

日に日に長くなった

あなたはわたしを 暗闇から守っているのだと
思っていた

けれど あなたこそ

わたしにとっての暗闇だった

あなたが子守唄を 歌っている間

わたしは 電車が遠くで走る音に

耳を澄ましていた

あなたがわたしに 薄桃色の靴下を

編んでいる間

わたしは 草にまみれた羊のにおいを

嗅いでいた

あなたがお腹を なでている間

わたしは いつの日か恋人が わたしの頬をなでるのを

感じていた

日が昇ると

あなたはまたもや わたしを産んだ

光にさらされ まぶしいわたしを

あなたが心配そうに 見つめているとき

わたしはなるべく

光を身に着け 目を開いてゆき

冬至の日 あなたとわたしの力は

等しくなった

あなたが目覚める前

わたしは 自分で選んだ曲で

目を覚まし

あなたの外の光を わたしの目で感じ

平泳ぎで あなたの暗闇をかき分けて

あなたから起きた

昔日のおもいで

三井喬子

「昔日のおもいで」というお菓子が届き
なんだなんだと神棚にあげ

とかく初めてってのはうきうきするから
踏み台から落っこちそうに急いで

落ち着け 落ち着け 見っともない

ただの餡子玉みたいだけれど

お餅かな

求肥かな

いそいそとほうばる

てな訳には行かない

お湯を沸かして

待って冷まして

お茶の新しい葉を急須に入れて

何という事もない昼下がり

お母さん

お茶を淹れたわよ

と 神棚に供え

あ お母さんは仏壇に居るんだったわね と

つまらない一言をかけて

見ん事 こちらの口に入る

御馳走様ね お母さん

「昔口のおもいで」は甘すぎて

必然的に 冷凍庫の中で硬くなり

一年経ってもそのまま

三年経ってもまだ残っていて
捨てるに捨てられない硬いおもいで
百年もたせてミイラにしよう

3つのリボン

有働薫

1つはピンクの繻子

12歳の黒い髪に結ぶ

普段は箱の中にしまっておく

1つは黄色

秋の日のお天気の良い真昼間に

カーデイガンの左右を胸の上で留めるために

左はしはボタンに右はボタン穴に結びつける

1つはグリーン

いちばん好きな色

今のわたしにはもう似合わない

このビロードのリボンは2メートルもあり

白いスカートのベルトの上に蝶結びして
端を長めに垂らしておく
そうしてクリスマスのお呼ばれに行く